

**立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）**  
**プロジェクト研究（単独プロジェクト研究）**  
**2012年度研究【経過・成果】報告書**

<b>プロジェクト主体研究科等名</b>	キリスト教学研究科		
<b>研究代表者</b>	所属・職名	氏名	
	キリスト教学研究科 特任教授	池住義憲 印	
<b>研究課題</b>	宗教間・文化間『対話』を通じたアジアの共存と平和～～国連プロジェクト『文明の同盟』のアジアにおける実践と今後		
<b>研究組織</b>	所属大学名等・職名	氏名	
	キリスト教学研究科・特任教授 キリスト教学研究科・教授 アジア保健研修所・研修/国際部門主任 非暴力平和隊・国際理事 日本国際ボランティアセンター・イラク 事業現地調整員	池住 義憲 西原 廉太 宇井志緒利 阿木 幸男 原 文次郎	
<b>研究期間</b>	2011年度 ～ 2012年度		
<b>研究経費</b>	2011年度	2012年度	総計
	2,400千円	2,400千円	4,800千円

**研究の概要** (200～300字で記入、図・グラフ等使用しないこと)

本研究はアジアの民衆ならびにアジアの NGO や教育研究機関の実践に焦点を当て、フィリピン、カンボジア、イラク、スリランカのアジア4カ国において実践されている「宗教間・文明間衝突や対立、葛藤の克服」、「相互の寛容と尊重の促進」、「共存関係の構築」の取り組み4事例を選定して日本ならびにアジアの NGO と協力して分析・検証し、個別のおよび普遍的な理念・原則・方法論等を具体的提言としてまとめる。

軍事的手段でなく徹底した「対話」を通して異なる宗教・文化・民族間での協力精神をいかに育むことができるか、アジアにおける今後の更なる「共存」と「平和」づくりをどのように進めていくか、今後日本が果たすべき役割はなにか、を明らかにすることを目的としている。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入)

{ 平和づくり } { アジア } { 対話 }

研究【経過・成果】の概要 (図グラフ等使用しないこと)

【研究活動の経過概要】

昨年度(2011年度)にフィリピン・カンボジア・スリランカ・イラク四カ国で行った事例研究調査を踏まえ、本年度は以下の活動を行った。

1. 研究調査内容の分析・検討 (2012年5~7月)

四カ国で行った事例研究調査内容の分析・検討するため、下記のとおり計3回、学内外研究分担者会議を開催した。(詳細は会議議事録参照)

<第2回会議>

日時 2012年5月19日(土)10:00~12:00

場所 立教大学池袋キャンパス6号館3階会議室

内容 「カンボジア事例」の分析・検討

<第3回会議>

日時 2012年6月2日(土)10:10~16:00

場所 立教大学池袋キャンパス6号館3階会議室

内容 「フィリピン事例」並びに「スリランカ事例」の分析・検討

<第4回会議>

日時 2012年7月21日(土)9:30~12:15

場所 立教大学池袋キャンパス6号館3階会議室

内容 「イラク事例」の分析・検討

2. 事例研究調査報告の作成 (2012年8月~2013年2月)

研究分担者会議での分析・検討を踏まえ、それぞれ4つの事例調査研究報告書を海外カウンターパートNGOと協働して、下記Formatを基本として作成した。

- ・ はじめに (事例研究の目的・概要・方法など)
- ・ 背景 (対象国・地域の概況、協働NGO団体の概要など)
- ・ 調査研究内容
- ・ 考察
- ・ 学び、教訓

3. 国際シンポジウムの開催 (2013年3月)

4つの事例調査を公開して報告・共有することと、それに基づいて非暴力による「アジアの共存と平和」のための基本理念・原則および今後への指針を探求するため、下記のとおり国際シンポジウムを開催した。

日時 2013年3月9日(土)9:30~17:30

場所 立教大学池袋キャンパス太刀川記念館3階多目的ホール

テーマ 「宗教間・文化間対話を通してアジアの共存と平和」

海外招聘者 ①Ms. Miriam Licera Suacito (フィリピン NGO : Nagdilaab Foundation 代表)

②Mr. Momoy A. Cohombo (フィリピン NGO : Nagdilaab Foundation スタッフ)

③Mr. Kep Kannaro (カンボジア NGO : PADEK 代表)

④Mr. Ya Bean (カンボジア・シェムリアップ州タサオム Commune Chief )

⑤Mr. Aree Najmuldin Jabari (イラク NGO : INSAN Iraqi Society 代表)

⑥Ms. Intisar Kareem Ghafour (イラク NGO : INSAN Iraqi Society スタッフ)

⑦Mr. Muayad Mohammed Ghafour (イラク・キルクーク市 住民代表)

参加者 90名 (学内関係者27名、他大学関係者19名、NGO関係者18名、一般市民24名、報道関係者2名)

備考 同時通訳(日英/英日)並びに聴覚障害参加者用に要約筆記(日本語)を行った。

**研究【経過・成果】の概要 つづき****【研究活動の成果概要】**

フィリピン、カンボジア、イラク、スリランカの4つの事例調査研究それぞれの成果内容はかなりの分量になるため、個々の成果内容詳細は各報告書を添付・提出することでここでは割愛し、以下、4つの事例調査研究から共通して得られた内容成果を報告する。

**1. 「宗教間・文化間・民族間」という枠組み設定の妥当性への疑義**

紛争の原因は宗教間・民族間の戦いであると捉えられがちだが、実は不公平で偏った権力、教育や仕事の機会の偏在、食料や土地など資源配分の不公正などが原因で起こっている。しかしそれが宗教間あるいは民族間の戦いにすり替えられている現実が見えてきた。

紛争・対立が起こっているのは宗教および文化が異なっているからではないにも拘らず、外部からの政治的思惑・意図等によって宗教間・文化間対立として煽られ、問題が単純化され隠蔽されている。

イラクの事例では、「地域外の政治的思惑によって民族や宗教の違いがことさらに煽られ、無用な対立が生み出されている」との報告があった。フィリピンの事例では、「もともと資源が原因の紛争が、民族グループ間の紛争に置き換えられ今日に至っている」との報告があった。

紛争解決および平和づくりにおいて、国連など国際社会が多用している「宗教間・文化間対話」という枠組み設定を前提とするのではなく、地域社会の人たちの生活向上・地域開発活動を一緒に行いながら、不公正な構造を村のレベルから変えていく枠組みこそ必要であることがより明らかになった。

**2. 紛争解決の主体者は紛争地域の住民当事者であること**

紛争を解決する主体者は、紛争地域でそれぞれ様々な宗教伝統・文化のなかで具体的な生活を送っている当事者であるということが実践の中から再確認できた。紛争の激しさなど状況に違いはあっても、そこに住む人の中にはなんとかしたいと思っている人たちがいる。家庭内暴力、ゴミの処理、土地境界線をめぐる紛争、食料不足、村びと間の協力不足など具体的な問題や紛争を解決しようとして、宗教・文化の違う人たちが互いに努力していくプロセスが重要であることが明示された。

宗教の差異があって紛争が起こるから宗教について知り合うという順序ではない。そうではなく、具体的な紛争を解決しようと努力する過程で、自分たちの宗教や文化がどのようなものであるか、再認識されていく。それを通して相手の宗教や文化への尊敬が生まれてくる。具体的な場で一緒に取り組むことが「対話」のスペースを生む。こうしたことを4つの実践事例は提示した。

**3. 平和の文化を創るために必要なこと：地域組織化、ネットワークづくり、協働、平和教育**

紛争解決の主体者である紛争地域に住む当事者の意欲的な取り組みが基盤となる。それをどれだけ広くその地域の人たちおよび行政も含めた関係者を巻き込んでいくことができるかが大切である。コミュニティの組織化は、地域の人たちが積極的に地域開発と平和づくりに関わる出発点となっている。多くの異なる関係者による協働とネットワークづくりは、地域の具体的な共通課題の解決に有効で、人びとの信頼と自信を取り戻すことに繋がっている。

平和づくりは、紛争の歴史が長い分だけ、解決するのに時間もかかる。暴力と戦争文化のなかで育った若者や子どもたちに対して、4つの事例はいずれも平和の文化を創り出すために早いうちから平和教育活動を行うことを最重要視している。これは偶然でなく、平和づくりにとって必須であることを示している。いま求められているのは、様々な立場の関係者をつなぎ、次世代の子どもたちが平和文化へ移行することを可能にするファシリテーターの役割が重要であることが明らかになった。

**4. JUST PEACE という考え方**

3月9日開催の国際シンポジウムでは、「社会の公正にもとづいた平和」(Just Peace)という言葉が何回か出された。社会の公正が伴うとき、平和がある。社会が公正でなければ、平和は訪れない。シンポジウム最後の部分で日本人参加者から、「ある人・ある地域を犠牲にして成り立っている平和あるいは繁栄の上に立っている私たち…」という発言があった。Just Peace とは、簡単な言葉で言えば、ほかの人を犠牲にしないで平和に過ごすこと。私たちは私たちの地域の平和を求め、別の地域の人たちの平和を犠牲にしてはいないか。他の地域、他の国の Just Peace を壊してはいないか…。シンポジウムの最後に、私たち日本に生きている者にとって、大切な指摘と問題提起を得ることができた。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多量の場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①&② 特になし

③国際シンポジウム開催

4つの事例調査を公開して報告・共有すること、そしてそれに基づいて非暴力による「アジアの共存と平和」のための基本理念・基本原則および今後への指針を探求するため、下記のとおり国際シンポジウムを開催した。

記

名称 「宗教間・文化間対話を通してアジアの共存と平和」のための国際シンポジウム  
 日時 2013年3月9日(土)9:30～17:30  
 場所 立教大学池袋キャンパス太刀川記念館3階多目的ホール

④その他

- a) 事例調査研究報告書 (2013年3月9日国際シンポジウム資料 日本語版) \*添付資料参照
- b) 事例調査研究報告書 (2013年3月9日国際シンポジウム資料 英語版) \*添付資料参照
- c) キリスト新聞 (2013年4月6日号) \*記事掲載新聞添付

2012年度の「研究発表」としては以上である。国際シンポジウムでの成果も含めて、今後、2013年4～7月に、学内外研究分担者および海外カウンターパート NGO と協働して、国際シンポジウム報告書作成とともに、非暴力による「アジアの共存と平和」のための基本理念・基本原則および今後への指針を作成する予定である。

2013年7月に作成完了予定であるため、雑誌論文 (立教大学キリスト教学会発行の『キリスト教学』誌など) や学会発表 (立教大学キリスト教学会、日本平和学会研究大会など) はそれ以降となる。